

法然上人讃仰会

2010

monthly
JODO

September

9

浄土会
一休文



握手した

じいちゃんと 握手して たくさんの事を 私は知った
 もう じいちゃんは 働けないと言う事
 すっかり じいちゃんに なった事
 ちよつと前返は 働けて 元氣だったのに
 じいちゃんと 握手して 嬉しい事も たくさん知った
 温かいと 言う事
 生きていると 言う事
 そして 何より じいちゃんが 優しいと 言う事

表紙の人と書

北村宗介・書家

『浄土』2010年表紙の

1958年静岡県生まれ。北海道大学卒業。書詩家木村三山に師事、書、篆刻を学ぶ。
 宮部みゆき著『孤宿の人』、火坂雅志著『軍師の門』、第140回直木賞受賞山本兼一
 『利休にたずねよ』等、題字揮毫多数。
 筆一本書法ライブ「辻書法」を各地で公演。

9月の書
くえいつしよ
 倶会一処
 必ず会いましょう

肉体の死により、この世ではお別れしましたあなたと、お浄土の極楽世界では、必ずまたお会いしましょう。

極楽世界とはそういう場所なのです。

この世で愛しあったあなたと、またこの世では折が合わなかったあなたとも、極楽世界はみんなと楽しく過ごせる場所なのです。
 (編集部)

浄土

2010/9月号 目 次

いのちの授業②	対本宗訓	2
会いたい人 横内謙介さん①	関 容子	8
江戸を歩く第35回	森 清鑑	16
響流十方	小村正孝	26
法然上人をめぐる人々④	石丸晶子	30
連載小説 渡辺海旭	前田和男	38
浄土誌上句会	選者=増田河郎子	44
マンガ さっちゃんはネッ	かまちよろう	47
編集後記		48
表紙裏 茜の詩	新納 茜	
背表紙裏 教えと法話	生野善應	



表紙題字=中村康隆前浄土門主
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎

いのちの授業

自らの体験を通してその
ありのままの真実に新たな
仏性の花を咲かせていく営み

② 笑い と 治癒力

僧医 対本宗訓

僧医 対本 宗訓 (つしもと そうくん)

1954年 愛媛県に生まれる
1979年 京都大学文学部哲学科卒業
京都嵯峨天龍寺僧堂にて修行
臨済宗天龍寺派前管長平田精
耕老師に嗣法 室號は岫雲軒
1993年 臨済宗佛通寺派管長就任
2000年 帝京大学医学部入学 同年佛
通寺派管長辞任
2006年 帝京大学医学部卒業
現在 内科医・僧医として活動中

著書

「坐禅(いま・ここ・自分)を生きる」
春秋社 1999年
「禅僧が医師をめざす理由」
春秋社 2001年
「僧医として生きる」
春秋社 2008年
「禅の逆襲(対談)」
春秋社
「(枯れて死ぬ仕組み)を知れば心穏
やかに生きられる」
河出書房新社 2010年
ホームページは<http://www.sokun.net/>

米国の著名なジャーナリスト、ノーマン・カズンズ（一九一五～一九九〇）が『笑いと治療力（邦題）』という本を書いています。それによりますと、彼は五十歳を目前にして膠原病を患ったのですが、信頼する医師に相談しながら、彼独自の考えによる笑いとビタミンCの大量投与でこの難病を全快させたというのです。私は医学生のためにたまたま書店でこの本を見かけて購入し、今でも時々何気なく読み返したりしています。

彼によると、ほんらい人間には自己治療能力があつて、愛や希望や信仰や笑いや信頼や生への意欲などが人体に積極的な効果を及ぼすといひます。こういったことを聞くと確かに、漫才が治療によいという話とか、医者が落語家になつたとか、生きがい療法の話とか、けっこう私たちの身の回りでも同じようなことが提唱され実践されていることに思い至ります。私も病院勤務のなかでいろいろな経験をするのですが、特にこのことに関連してこれから述べるKさんとの出会いを忘れることができません。

この六十代なかばの患者さんは大の病院嫌いで、しばらく前から胃のあたりに不調を感じていたのですが、あえて自分から受診することはありませんでした。そうこうするうちに体重が減り、しだいにお腹が膨らんできて、それでも「ビール腹だ」と言つてごまかしていたものの、さすがに奥様が「これはおかしい」ということに気づき、無理やり引っ張られるようにして病院へやってきたというわけです。

おいでになった時にはお腹がパンパンに膨らんで息が苦しうでした。ひととおりの診察と検査をして、主治医は胃癌の腹膜播種による腹水貯留という診断を下しました。要するに、胃癌が進行して胃の壁を突きぬけ、癌細胞がお腹の中に散らばっている状態です。

そうするとお腹の中に水がたまって布袋^{はてい}さんのように膨らみ、横隔膜が下から押し上げられるので呼吸が苦しくなるのです。こうなると患者さんは仰向けには寝ていただけません。横向けに寝るか、あるいは半座位といって、リクライニングしたような姿勢で何とか少し楽になるくらいです。

いよいよ診断と今後の治療方針をお伝えする時がきました。Kさん本人もあるていど予想はしていたのでしようが、いざ真実を知らされると見る見る顔が青ざめ、足がわなわなと小刻みに震えています。主治医からの説明が終わって、奥様といっしょに病室へ帰られたのですが、心配になって私が様子を見に行ってみますと、「ねえ先生、オレやっぱり癌なんだって」と作り笑顔の口元がゆがみ、目が明らかに泣いています。

それからしばらくの間、Kさんはげっそりとして明らかに抑うつ状態でした。私は原則的に告知はすべきとの考えですが、今回もほんとうにそれでよかったのかどうか、もう少しタイミングをはかるべきではなかったのか、さすがに考え込んでしまいました。

ところがある日から、Kさんの態度が一変します。何がきっかけでそうなったのかは知りませんが、「Kさんどうしたんですか？」と私が思わず尋ねると、「人間どうせ死ぬなら、めいっばい楽しまなくちゃ損だよ」という返答でした。

Kさんの豹変^{ひょうへん}ぶりはいいますと、私がどの病棟^{いたずら}へ行っても、「センサーエー！」と思いがけない方向から呼び止められます。振り向くと、悪戯^{いたずら}っぽい笑顔のKさんが手を振っています。点滴台をガラガラ引っぱりながら近づいてきて、昨日あったこと今日あったことを大げさなジェスチャーを交えて面白おかしく語ってくれます。屋上へ出て喫煙室の前を通りかかっても、ほんとうに病院中、Kさんの姿のない場所はどこにもありません。

各病棟にはどうやら悪友(?)ができて、似たようなオヤジさんどうしでさかんに問題行動をくりかえしているとも聞きました。病院をそつと抜け出して近くの酒屋で小さな缶ビールを仕入れてきて、屋上でひそかな酒盛りをしたり、「お供」と称してお気に入り看護師さんのあとを追っかけたり、まあ誰に深刻な迷惑がかかるわけでもなく、程度からすれば可愛いものなのですが、とにかく至るところに出没してやりたい放題のことをやって、余命何ヶ月という診断などこ吹く風。さすがにお腹に水がたまると苦しうに横臥するのですが、水を抜いてもらって少し楽になると、もう放逸の虫が騒ぎ出します。

こうやって四六時中、冗談言ったり若い看護師さんにちよっかい出したり、朝から晩まで「ハッハ、ハッハ」と笑いながら入院生活を百二十%エンジョイするKさんの様子を見ていて、癌告知によるあまりのストレスに気がおかしくなったのではないか、あるいはうつが躁転したのではないかとさえ考えるスタッフもいたようです。

ただしそうはいってもKさんの全身状態はやはり下降線でした。奇跡が起こって末期癌から生還したわけでは決してありません。思ったよりも緩徐にはありましたが、確実に衰弱していつ、最期にはまるで蚕蛾のように小さくなって亡くなっていました。ただはっきり言えるのは、Kさんは主治医が現代医学の観点から予想したよりはるかに長い余命を、しかも実に生き生きと楽しみながら人生を全うすることができたということです。

現代医学は長い間、「なぜ病気になるのか」を追究することで進歩発展してきました。しかし近年、むしろ「なぜ治るのか」というふうに発想を百八十度転換して考えようとする流派が増えてきました。そういった人たちの多くの共通した考え方として、生体には本

来「治癒システム」とでも表現すべきものが備わっているのではないか、と言われている。

従来、免疫や恒常性のはたらきを含む「自己治癒能力」や「自然治癒力」を提唱する人は多くいますし、今はやりのホリスティック医学の中心概念もやはり同じものだろうと思います。ただしなぜ人が治るのかという仕組みについてはまだまだわからないことだらけであるため、上位に「治癒システム」という大きな概念を置いて、より包括的に考えようというわけです。

この「治癒システム」は一つの作業仮説でもありますので、科学者の立場からはふつう説明にたいへん苦慮するのですが、僧医としての私はその点有利なもので、この「治癒システム」を「わが身に具わった（大いなるいのち）のはたらき」と宗教者の立場でさらりと言っていることができます。

笑って笑って笑いころげて笑いの底が打ち抜けたとき、自己のはからいががらりと崩れ去り、わが身の命が（大いなるいのち）（ほとけの御いのち）（無量の壽）と直接つながり感応道交することによって治癒や症状の緩和が起こる、と私は説明します。当然のこと医者の科学的思考ではこれらの宗教的なとらえ方はなかなか理解されませんが、冒頭に掲げたノーマン・カズンズの説を援用するならば、愛や希望や信仰や笑いや信頼や生への意欲などが「治癒システム」のスイッチを入れるということなのです。全身全霊での「念仏」や「祈り」や「禪定」が実際の治癒につながる道理は大いに認められるはずです。

笑いがいかにして治癒をもたらすのか、その科学的メカニズムの解明は今後の課題とし

て、具体的なやり方はノーマン・カズンズの場合、看護師にユーモア本を読んでもらって笑いこけたり、「どっきりカメラ」のようなコメディ番組のフィルムを何本も見て抱腹絶倒したりして十分間とことん笑うと約二時間ほどは痛みを感じずに眠ることができたと書かれています。実はこの「笑いの鎮痛効果」は現代の緩和ケアの現場でも認められており、うまく応用すればモルヒネの量が少なくてすむとまで言われているようです。

実際Kさんの場合も、彼は確かに一日中笑いこけて明るく陽気に過ごしていました。抑圧していたものを解放することによる心理的な効果も見逃せませんが、やはり少なくともあの快活な笑いこそが何らかの仕方です「治療システム」のスイッチを入れ、その結果、KさんのQOL（生命の質）は誰が見ても向上しましたし、たいして苦痛に苛まれることもなく、余命も予想以上に長く穏やかな終末期を過ごせたのではないかと思うのです。

担当医の一人としてさんさんに手を焼きながらも、いろいろなことを教えられたKさんの最期の日々を思い出しながら、禅僧にもどった私は色紙に筆を走らせて下手くそな布袋さんの絵を描き、「笑門不苦来（笑う門には不苦来る）」と賛を入れます。言うまでもなく、「福」を「不苦」と書き替えて治療力のある笑いをお勧めしているつもりなのですが、読者の皆様はいかがでしょうか。

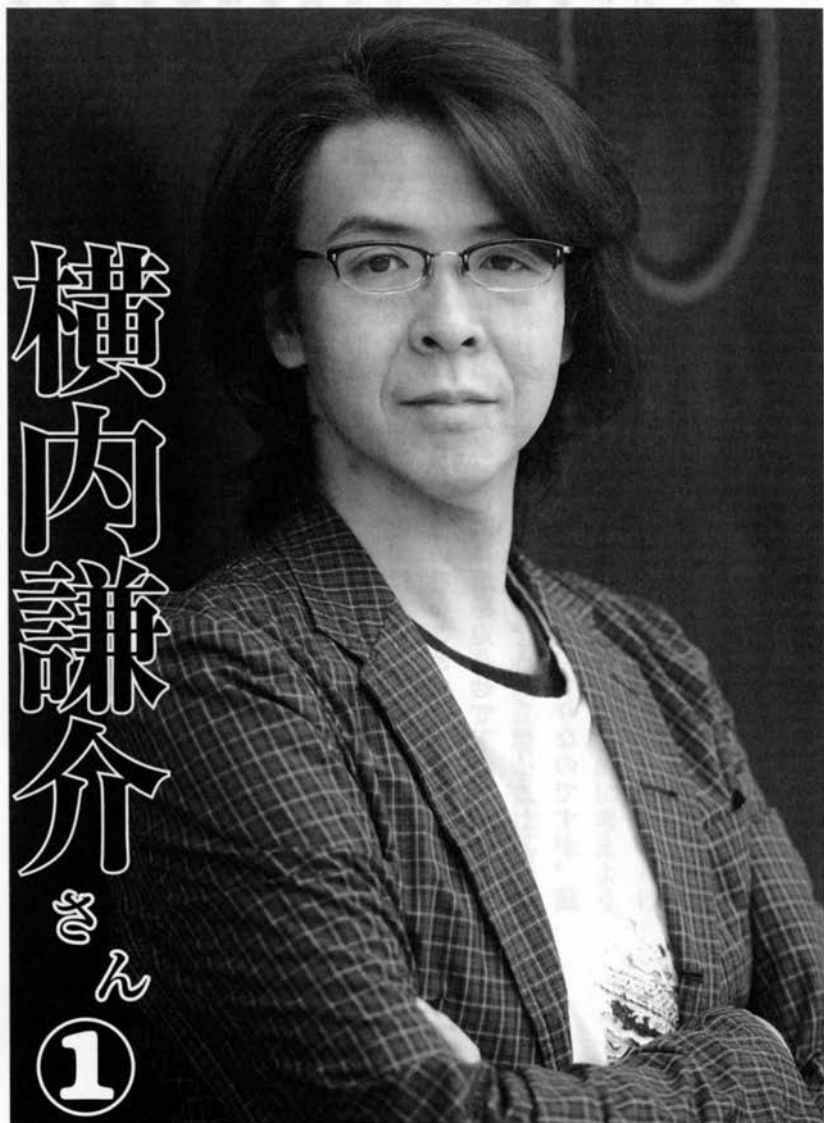
連載

会いたい 関 容子 人

横内謙介

さん

①



撮影／タカオカ邦彦

劇作家横内謙介の名前を初めて見たのは、昭和六十三年に新しく開場したセゾン劇場（現在はル・テアトル銀座）で上演された中村勘九郎（現・勘三郎）主演の『きさらぎ浮世伝』の作者としてだった。勘九郎さんが当時心酔していて、私は何度もその名前を聞いていたテレビドラマのディレクター河合義隆演出、とあって、期待して観に出かけた。その芝居は江戸・寛政期の版元、蔦屋重三郎を中心に、歌麿や写楽や京伝らが幕府の弾圧と闘う姿を派手に描いた青春群像劇で、勘九郎を初めとする原田大二郎や川谷拓三など、三十代の俳優たちの若いエネルギーが舞台に満ち満ちていた。

しかし筋書の作者紹介で、横内謙介、昭和三十六年生まれ、とあるのを見たときはびっくりした。若冠二十六歳の青年ではないか。

この芝居が縁で、横内さんは市川猿之助に見出され、『八犬伝』『カグヤ・新竹取物語』『新・三国志Ⅰ〜Ⅲ』『雪之丞変化』『龍神伝』

『新・水滸伝』など、スーパー歌舞伎の作者として大活躍するのには目を見張らされた。

でも私が心底感嘆した横内作品は、彼の主宰する小劇団、扉座公演の『お伽の棺』を観たときだった。平成六年の初演を観てきた当時の勘九郎さんのマネージャー、星野和子さんが熱く評判を語るのを聞いて、再演のときに一緒に観た。

この芝居はお伽噺『鶴の恩返し』や戯曲『夕鶴』と同様の題材を扱いながら、鶴を海に向うから流れて来た異人（余所者）の女としていて、雪深い貧困の集落に暮らす者たちが、やがて都合の悪いことを総てこの女にかぶせ、自分たちの安穩を守ろうとする……。人間のずるさ、怖さを見せつけられてゾツとするような、深い作品になっていた。

あれを観てから二十年近くたったわけだが、横内さんはまだ若々しい、五十前。

「ほくの『お伽の棺』にたどりつくまでに、高校の演劇部で木下順二作の『夕鶴』にほく

会いたい人



1979年大分での全国高等学校演劇コンクールで演じた『山椒魚だぞ』(上)と善人会議を主宰していた頃の横内さん(下)。



が出演した、という序幕があるわけです。神奈川県立の厚木高校に在学中、当時の高校の演劇部って、女の子とちよつと変つた男の子しかいませんでした（笑）。その先輩から、演劇部がつぶれそうだから名前だけ貸してくれ、つて言われて、すぐやめるつもりだったんですよ。でも演劇部員には神奈川県青少年センターの芝居を五百円で観せるから、やめてもいいけどその前に観てごらん、つて連れてつてくれたのが、たまたまつかこうへいさんの『熱海殺人事件』だったんです。観たら、すごく荒々しくて、サディスティックで、かつこよかったから、芝居つて面白いなあ、と思つて演劇部に残りました。でも古い体制の演劇部でしたから、女子の先輩たちは多分『夕鶴』のつうがやりたいというだけの理由でこの演目を選んだんだと思うけど、ぼくは与ひようをやらされましたよ。でも『夕鶴』つて、つう一人が楽しいだけの芝居で、まわりは欲に目がくらむバカなやつとか、あとは

子供とか、全然しどころがないんです。いたいこれは何なんだ、つて感じ。片方でつかこうへいが好きで演劇を始める気になったのに、こつちは、のぞくとか言われてのぞいたら鶴が^{はた}組織つてとか、バカみたいだな、と思つて（笑）。十六歳のときに感じた違和感がそのまま続いて『お伽の棺』になるわけです。鶴と結婚するつてどういうことか、つてずつとひつかかつてたんですね」

横内さんがこの作品を書いていたときは、ちようどスーパー歌舞伎の仕事をしていたころと重なるはずだ。

「ええ、神話とか古い話の構造はどうなつてゐるかと、そういうことに興味を持つて仕事をしてましたから、鶴の話も単にお伽噺としてでは支え切れないものを見直す習慣がついたんだと思いますね」

『お伽の棺』とはどんな芝居か。劇中にときどき主人公の善治の語りを入れて芝居が進行する形式が斬新でまず面白かった。善治が雪

に埋もれて死にかけている若い女を助けて帰ってくる。母親は余所者は災いの元だからすぐに捨ててこい、という。善治は母親と争い、誤って山刀で母を殺してしまう。女は棧屋に入り、二日二晩、棧を織り続ける。女が、自分は異人であることを泣いて打明けて、二人は強い絆で結ばれる。と、そのとき、暗い場内の後方から、耳慣れない異国の女の強い歌声が強く響き、振り向くと、ローソクの灯を捧げ持った民俗衣装の女が静かに歩を進めてくる。

「ああ、モンゴルの歌手のオトバルさんですね。あのころ、スーパーステージの大劇場のスペクタクルで明るく楽しく退屈させない、というのに対抗するつもりで、こっちは小劇場で、照明も音楽もなしでいこうと思ったんですが、さすがに何にもないというのでは不安になってきて、何か劇の途中で箸休めみたいなことを入れよう、歌か演奏がいいな、アジア系がいいんだけど、と言ってるうちに、モ

ンゴルから来日したての女性歌手の声がすごい、という話を聞いたんです。それで劇団の物置きみたいになってる稽古場で聞かせてもらった。すると、彼女が歌い始めたら窓ガラスがビリビリリツと鳴ったんですよ。ものすごい迫力でした。彼女はその後日本人と結婚して幸せで、ずいぶん柔らかくなっちゃったようだから、今はもうビリビリ鳴らないかもしれないですけどね」

平成二十年、扉座はこの作品を韓国の釜山国際演劇祭に出品した。余所者の若い女の役に韓国の女優を配し、時折韓国語を混えてしやべらせるといふ横内演出がびつたり効果的で、とても好評だった。

「元々、そういう芝居ですからね、これは……韓国公演のときの音楽は、韓国の宮廷で歌われている正歌정가の中に哀調をおびたびつたりのがあつて、それを使いました」

横内さんの高校演劇部時代の話に戻る。

つかこうへい作の『熱海殺人事件』を観た十五歳の横内さんは、演劇には大声の出せるパワーのある男が出てこないと言メなんだということに気づく。

「それで剣道部に岡本君（現岡森諦）という身体も声もでっかいのがいたんで、演劇部に誘ったんです。これまでの古くさい新劇みたいな高校演劇じゃなく、つかさんみたいなカッコいい芝居を二人で始めたら、それが面白そうに見えたのか翌年下級生が大勢入ってきた。その中の一人が六角精児で、今も扉座の主要メンバーですけど、そのころから今みたいな丸い目鏡かけて、ムクツとして、気持の悪いヘンなやつだったんですよ（笑）。よし、これを主役にして芝居を作ろうと思って、ぼくが台本書いて全国高校演劇大会に出場して、二位になったんです。二位というのは、厚木高校は初出場だったんで、上演時間が一時間以内というルールを知らずに、毎日どんなにつけ足していつて何分間かオーバーして

しまったんですね。本来ならそれで失格になるはずだったんですが、審査委員だった劇作家の清水邦夫さんが、それはあまりに惜しいとおっしゃって、二位になったということでした」

同時に創作脚本賞も受賞した横内さんの第一作『山椒魚だぞ！』は、山椒魚のように岩屋の中にじつと閉じこもった受験生が主人公。「これもつかさんの真似でガンガン歌謡曲流しながらやってたりして珍しがられたんだと思います。ほかの学校は高校の先生が真面目な台本書いたり、菊池寛の『父帰る』なんかを平気でやってましたからね。それで当時ぼくたちは神奈川県では一躍有名になった（笑）。高校卒業したけど、大学は三人とも落ちて浪人する。翌年、早稲田の第一文学部に入った。芝居で誉められた栄光が忘れられず、演劇をやろうということになったんですけど、当時はまだアングラの時代が終ってなくて、劇団に入るときは喧嘩みたいなことしなくて

1999年11月、下北沢「劇」小劇場での『お伽の棺』。



や入れないとか、演歌を歌ってみたい、ヘンな肉体訓練があったり、それがいやだったんで結局自分たちでやったほうがいい、ということになって作ったのが劇団『善人会議』です。

ほんと岡森と六角で旗揚げするいうときに、誰かの紹介で来たのが法政二高で演劇をやった杉山良一なんです。ですからこの四人が旗揚げメンバーで、現在の扉座につながってきているんです」

杉山良一さんには『お伽の棺』の善治役で強烈な印象があったが、その後病気で倒れ、今は後遺症のリハビリ中だとか。

そう言えば扉座には茅野^{かやの}イサムというイケ面俳優がいて、これも星野和子さんに誘われ、下北沢の駅前オフオフ劇場で『ドン・ジュアン』を観たことがあった。

「そんなのまで観たんですか（笑）。あれは井上優といそがし一座の公演なんですけど、茅野はうちのメンバーです。ぼくたちが下北沢のスズナリで芝居をやり始めたころ、その名物支配人の酒井さんという人はいろんな小劇団の面倒をよくみた人なんです。茅野はスズナリに別の劇団で出てて、そこがつぶれて行き場がなくなつて、酒井さんにどこか面白いとこないか、つて訊いたら、今面白いのは『善人会議』だと言われた。それでぼくたちがスズナリで芝居終つて、バラシをやつてたら、誰よりも働く見知らぬ男がいて、挙句の果にトラックまで運転してくれて、気がついたら打上げの席にいて（笑）、劇団に入ってください、つて。さんざん働かせたあとでしたから、もういいも悪いありませんで

したけどね」

平成十一年、扉座公演の『アゲイン〜怪人二十面相の優しい夜〜』に茅野イサムが中年探偵団の一員として出演したのを憶えている。隠居生活から現代に甦るおかしくて哀しい二十面相の役は近藤正臣だった。

「井上優は今、明大で演劇学の先生やつてるし、茅野は演出家だし、結構な者になつてますよ」

思えば、横内さんを高校演劇部に誘い入れた先輩の功績は大きかった。『夕鶴』のつうをやりたがった女子の先輩もえらかったと思う。その後、演劇界にこんな多彩な展開をもたらす結果を生むのだから。（つづく）

大阪松竹座九月（9月3〜23日）
横内謙介作『花の武将』前田慶次
片岡愛之助・賀来千香子主演

第三十五回

江戸を歩く

本所から深川へ



森清鑑

大江戸ウオーカー

回向院

両国橋を渡ると両国東広小路である。西岸の通称、両国広小路と称される西広小路と比べると面積は小さいが広場である。広場を突っ切ると正面にさらに西に行く細い道があり、ちよつと歩くと回向院の西門。回向院はほぼ長方形で現在よりも数倍広い敷地である。この寺は明暦の大火で亡くなった大勢の人々（無縁仏）を幕命によって葬った万人塚から始まる。したがって開創は明暦三年。浄土宗、遵誓上人が冥福の大法要を行う。以来、江戸庶民に尊崇される寺となった。天明元年（一七八二）、寺の境内で勸進相撲が開催される。今日の大相撲の起源である。明治後期にその場所に両国国技館が建つ。絵師で戯作者の山東京伝（一八一六没）、近松門左衛門と組み、多くの人形浄瑠璃を手がけた浄瑠璃義太夫の創始者、竹本義太夫、数十カ所の武家屋敷から盗みを働いた鼠小僧次郎吉などの墓

もある。

回向院の東隣が本所松坂町で元禄期吉良上野介の屋敷があったところである。赤穂浪士が討ち入ったのが元禄十五年十二月十五日午前四時。その時、この地名は本所一つ目。上野介は鍛冶橋御門内の屋敷で生まれ、江戸城儀典長の時には呉服橋御門内に住まいしていたが、松の廊下事件の後、開拓間もない、本所のこの地に追いやられた。敷地約二千五百坪。辺りはまだ開拓されたばかりの余韻が残っていたと想像され、左遷の想いをしたであろう。本所は義士の面々が蕎麦屋とか剣術道場主とかに姿を変えて住み、吉良邸の動静を探った処でもある。

松坂町の東隣の一画は旗本の住居。御台所町通りと南の堅川通りに挟まれている。この一画には蜘蛛の足のような池が巡らされているが、その中央東詰めに幕末の剣豪にして講武所頭取、男谷精一郎信友の屋敷があった。言うまでもなく男谷は幕末の剣聖。歳はずっ

と上だが、海舟の従兄弟。勝麟太郎（海舟）はこの本家の離れ家で生まれ、後に大横川沿いの旗本岡野孫一郎屋敷内の宅で育った（海舟の妻は岡野の養女）。親父の小吉は、男谷家の三男で勝家に養子に行った関係で勝小吉となったのである。彼の書いた「夢酔独言」は本当に面白い。「俺みたいな馬鹿なことをしてきたら駄目になるから決して俺のまねをしてはならない」と後の世に繋がる末裔に言っている類のもの。当時の江戸弁が生き生きと語られ、反面教師まるだしの本である。剣も柔術もめっぽう強く、馬術にも優れ、道場破り、刀剣売買、喧嘩に明け暮れる。喧嘩については新門辰五郎も「最強」と認めている。一方で弱い立場の人を救い、喧嘩の仲裁もやる。義を貫く破天荒な人生。地位も、教養も無かったかも知れぬが、途方もない能力の持ち主であった。

割下水

男谷屋敷の東裏の道を北に歩くと、すぐに本所亀沢町御用屋敷。隣接して馬場。その北は大川まで広大な幕府の御米蔵がある（御竹蔵という材木蔵でもある。現江戸東京博物館、国技館など）。この敷地内にも米を運搬する広い水路が張り巡らされているが、さらに敷地全体を大川と繋がる細い堀が囲んでおり、その東中央から東西一直線に大横川まで流れている水路が南割下水（わりげすい、現北斎通り）である。道の中央に掘られた幅二間ほどの下水路。下水路といってもその水はさほど不潔なわけではない。江戸では汲み取り便所が徹底しており、ここに排水されるわけではなく、加えて生活排水といっても植物性の有機質で低磷。割下水に住んだ小林一茶は「うぐいすが呑むぞ浴びるぞ割下水」という句を残し、明治の初め頃、元旗本屋敷を買い取った、三遊亭円朝は割下水から引いた水で池を造ったとい

う。南割下水の南北は旗本、御家人の屋敷がびっしり。武士が割下水を挟んで挨拶。川柳にいわく「黙礼のなかを流るる割下水」。「三人吉三」などで有名な歌舞伎狂言作者、河竹黙阿弥は割下水北に接する家宅で没し、幕末の英傑、江川太郎左衛門英龍は、津軽越中守上屋敷左隣の割下水南に接する宅で終焉。彼の屋敷には中浜万次郎（ジョン万次郎）が一時住み込みで外国語の翻訳に従事している。

御米蔵の堀から東に流れる南割下水出発点近くで北斎は産声を上げた（亀沢町一丁目）。この割下水沿いに東にさらに歩くと南北に流れる大横川長崎橋に出る。橋の手前で大横川と並行して南北に流れる割下水があり、それに沿って左に曲がり北に歩くと左手に妙見社。幼児期に急所を犬にかまれ重傷を負った勝麟太郎（海舟）を負ぶって親父の小吉が必死に快復祈願した小さな社である。これを左に見てちょっと北に行くと、南割下水と並行して東西に流れる北割下水にぶつかる。この

ように割下水は本所をコの字に囲んでおり、まさに水の都の感がある。

豎川

男谷の屋敷の南が本所相生町。河岸に続いて大きな豎川が東西に流れる。回向院西側沿いの道を南に下れば、豎川、大川河口の一ツ目之橋。それから東の中川までが豎川である。川幅も広く、川岸には杭が打ってある。東に二ツ目、三ツ目、四ツ目の橋が順次に架かり、五ツ目、六ツ目は渡し場。本所らしい美しくも活気に溢れた光景が目飛び込んでくる。北斎の富嶽三十六景「本所豎川」から望む富士は二ツ目之橋相生町四丁目辺りから西南を描いたもので、川の兩岸に林立する材木は、南に材木の集積地、木場を控えて材木問屋がひしめいていた図である。

本所から深川へ

兩岸のあちらこちらに材木が林立してい

と呼ばれ、劍の腕も立ち、その名を聞けば無頼の輩も首をすくめるほど。処が、京都奉行就任中の父が急逝し、代々続く長谷川平蔵を次ぐと、生活態度は一変。歳を経るに従い、大人物となり、偉大な功績を挙げた。

二十代後半で家督を継いだ平蔵は順調に出世し、四十二歳で火付盗賊改方頭（長官）を拜命。この時、天明の大飢饉の影響で田畑を手放した農民などが江戸に流入。江戸でもおいそれとは食えず無宿人となり、挙げ句の果てに火付け、盗賊になる者が激増した。平蔵は若い頃の放蕩無頼で培った人脈をフル活用し、犯罪者を次々と逮捕。盗賊からは「鬼の平蔵」と恐れられたが江戸っ子には強い味方。賞賛の声が上がる。火付盗賊改とは、民はおろか武士に対しても権力を揮える立場。しかし、平蔵は極悪人や更正の見込みのないものは容赦なく罰したが、更正の見込みのあるものには温情を示した。また、誤認逮捕したときには、たとえ数日でも牢に入れられれば妻

子を養うのにも大変であろうとその日数分の手当を自前であがなったという。だが、火付盗賊改長官という職務は大変な激務。しかも組織的な悪行犯罪者を捕縛するということは命がけの職務でもある。さらに大変なことは多額の資金を要すること。大体、官舎というのはなく、平蔵の家宅が本拠地。何十人という与力、同心を使い、犯罪摘発にいたる調査費用も大変なものである。長谷川家の家禄は四百石。それに幕府から費用が出て到底賄いきれるものでない。たとえ平蔵に代わるほどの有能な人材が担当したとしても、そうした状況では手も緩む。したがって、このような職務は平時であっても任期せいぜい一二年というところである。そして町奉行に榮転するところだ。ところが平蔵の時代は、前述の通り、大飢饉の余波を受けて異常なほど無頼人が横行した。結局、平蔵の任期は八年に及び、火付け盗賊改長官のまま、死ぬまで真剣にやり遂げることになる。平蔵を火付盗

賊改に登用したのが田沼政治を一掃する寛政の改革に着手した松平定信。しかし、きれいな政治を目指す、定信とその幕閣達は、平蔵の過去や清濁併せ持つそのやり方に、人間的にあまり高い評価をしていなかったようである。このあたりいかにも殿様の態度である。だが、平蔵の実績はめざましいものがあり、余人を持って代え難く、結果的にこの過酷な仕事を長期に亘って平蔵に強いことになった。それでも幕閣の中で、定信だけは苦々しく思いながらも「平蔵のようなものでなければ誰があした大悪人を捕縛し得ようか」との土壇場の理解を示していたようである。

長谷川平蔵の最大の功績はなんといっても人足寄場の設置である。捕らえても捕らえても、悪行をなすものは治まらない。更正が期待されるものでも再び罪人となって戻ってくる。これは何故か。手に職を持っていないから、更正しようにも更正できない。そう考えた平蔵は人足寄場の設置を定信に提案する。



◆石川島人足寄場

これは世界にも希な画期的な構想である。

平蔵はまず無宿人という言葉を避ける。手に技術を持ち、更正する人達のその後を保証するためである。人足寄場は定信の力もあって佃島の北、海に隣接する埋立地、石川島に決定。ここに一万六千坪に及ぶ壮大な更正施

設が誕生する。当時の石川島は、大川が江戸湾に広がる処。その中央、小さな佃島の北に浮かぶ約三万四千坪の島（大川端リバーシテイ21）。佃島住吉社の北側の水を隔てて石川島の稲荷。その背後に役所、置き場、畑、見張番所など施設が整っている。鉄砲洲から直接寄場の渡しという航路があり、専用の船着き場がある。船頭や寄場奉行の住まいもある。送られてきた者にはここが牢屋ではないことを強調。通常、罪人には鬻を結うことは許されないがここでは問題なし。遵守すべきことを諄々と説き、職技を身につけることに邁進させた。大工、左官、屋根葺き、鍛冶、表具、紙漉、蠟燭・足袋・草履・桶・炭団・竹笠つくり、髪結い。女性には洗濯、裁縫、機織りなどの手業も仕込んだ。これらを一般の仕事に結びつけ、そこから上がる利益を明確に設定する。次にそうして得た作業収益を三つに分けて配分する。一部は本人に支払い、一部を出所後の元手として預かり、残りを施設

設の運営費とした。ここでは道徳、学問も教え、健康面での配慮もなされ、病棟を備え、病人を診察。寄場の収容期間は三年と設定しているが、自立の見込みのある者はその前に世に出し、再犯の恐れある者はその後面倒を見た。さらに、釈放準備に入った者には、無地の衣服を着せ、施設の外での仕事や買い物を通し、釈放の時には自立手当金を支給。寄場が保証人となって店舗、農地を借り与えた。

平蔵のこれほど仁愛溢れる扱いが人足達の心に響かぬわけがない。平蔵亡き後の安政三年の大地震と大津波は寄場にも被害を及ぼす。この時、幕府は人足達を解放したが七十人は残って防災に努め、出た者は全員戻ってきたという（松本清張「海嘯」）。そうした結果、如何なることが起こったか。明治維新に至る、寄せ場の歴史八十年間に役人が人足によって被害を受けたという記録はなく、改心し、正業に就いた者、毎年二百人。

しかし、平蔵の苦勞は並大抵ではなかった。この間も、火付盜賊改長官の激務を続けているのである。しかも盜賊改、寄場運営ともに特に經濟的苦勞は計り知れなかった。双方に私財を注ぎ込む。それでも足りずに平蔵は、幕府から支給された運営資金を錢相場に投資、上がった利益を運営費に注ぎ込むなどの算段をする。それ自体、平蔵にしかできない、凄まじい行動力である。しかし、いくら乏しい予算とはいえ、公金を投資に回すという行為には、松平定信も不満である。平蔵の功績を認めつつも、「山師」と呼ぶことになる。

長年の無理がたたり寛政七年（一七九五）平蔵はついに病に倒れる。この時、危篤の報を聞いた、將軍家齊は、直ぐさま、飛び抜け高価な薬を下賜する。これは異例なことである。だが、その甲斐もなく数え五十才で生涯を閉じる。火付盜賊改長官の職を解かれたのは初七日を迎えた日のことであった。松平定信は、後日、心底から平蔵を評価し、自伝に

こう書き記している。「人足寄場によって無宿人達は減り、犯罪も少なくなった。これはすべて長谷川平蔵の功績である」（自伝「宇下人言」）。

長谷川平蔵は偉大な人物である。しかし、平蔵が人足寄場にかくも力を注いだのには分けがある。それは若き放蕩の日々に父、宣雄が我慢に我慢を重ねて平蔵を一人前にしてくれたことへの感謝である。一度、手を犯した者が完全に更正することが如何に難しいことか、平蔵は身を持って知っていた。そして父への感謝を現代でも及ばぬ内容の、画期的な寄場創りに振り向けたのである。そこには決して「人間をあきらめない」という信念が宿っている。

深川開拓

長谷川平蔵旧宅前の道を西に大川に向かって歩く。四角ほど行くと五間堀川伊予橋に着く。この橋を南に下ると掘留となっており、

北に上り、くの字に西に折れると右手に弥勒寺、左手に長慶寺の屋根が見える。弥勒橋を過ぎると北の堅川と南の小名木川を南北に繋ぐ六間堀に出る。いずれも江戸初期に掘削された重要な水運路である。この辺りから南一帯は全て深川となる。弥勒橋付近の、堀沿いの道は「鬼平犯科張」にも度々登場。六間堀を南に下る。堀の両側は深川六間堀町の家々。左手二角目の道を東にちよつと行くと森下富士が見え、神明社別当泉養寺（深川神明宮）がある。

この神社は、この地を開拓した深川八郎右衛門が自分の屋敷内に祠を建て伊勢神宮の分霊を祀ったことに始まる。彼は摂津（大阪）の人。一族を引き連れてこの地に来る。当時三角州で葭だらけの湿地帯。開拓に着手。慶長元年（一五九六）江戸に入府した家康がこの地を視察。すると人など居ないと思っていたのに人に会う。家康が地名を訪ねると「住む人も少なく、地名はありません」。「そ

れならそなたの名前をとり、深川村としよう」と家康。その後の開拓の功績により、家康は深川家を代々の名主に任じる。つまりここが深川の発祥地ということになる（森下町）。佃島もそうだが豊臣期、摂津人の漁業技術と土木技術は日本一。彼らは低地に大阪市街地を造った。培ったその技術で佃島や深川を開拓していったのである。その後、深川氏は代々、深川を開拓、拡大させ、ついには深川二十七ヶ町を東ねる名主となる。残念ながら七代目で断絶するが、これには分けがあり、その潔さを持って江戸っ子の崇拜は揺るぎない。深川氏の菩提寺泉養寺は、関東大震災後、千葉県市川市に移転。その開拓者の遺徳を偲び現在も追善供養が営まれている（資料 深川神明宮）。

もしも愚者がみずから愚であると考えれば、すなわち賢者である。
愚者でありながら、しかもみずから賢者だと思う者こそ、愚者だ
と言われる。

（初期経典「ダンマパダ」六六偈）

※岩波文庫「ブッダの真理のことば 感興のことば」より）

表裏いづれを

遅まきながら、司馬遼太郎『坂の上の雲』（文春文庫 全八巻）を最近はじめて読んだ。昨年の暮れ、NHKで放映されたこのドラマを観たのがきっかけだったが、幕末から明治、大正という時代に対する自分の認識があまりにも低いことへの反省も理由の一つにある。

この本は、日清・日露両戦争（八割方は後者）の“ノンフィクション”である。幕藩の時代が終わり、新しい国家がたどったらしい船出を始めた明治という時代、世界から押し寄せる荒波、急速に近代化、国際化を図ろうとする中において、氏は起こさざるを得なくて起こした戦争と見る。開戦に至るまでの経緯、戦中のさまざまな事象が詳細に語られている。

しかし、いわゆる“戦争もの”が、概して著者のパトリオティズム色が濃厚に顕れ、登場人物に対し英雄的取り扱いがなされたり、反対にひたすら凄惨さが描かれることが少なくないのに比し、この作品は戦いそのものの描写よりも、むしろこの戦争に関わった多くの軍人あるいは為政者の、人間としての“性”に踏み込む作業に力が注がれている点において、一般的な“戦争もの”とは異なるように感じる。（ここでは“司馬史観”というものは脇においておく）。

読んでいくと、「無能」という言葉によく出会う。とくに中盤、旅順攻撃を

はじめとする諸方面での陸戦を描いた部分に類出する。部隊を率いる上官が、好き嫌いや偏向性、保身などを、統率あるいは作戦決定の指針としたためにさまざまな「過ち」を重ねてしまったことを、著者は手厳しくそう表現した。

「無能」は一般的に、役に立たないとか、才能がない、の意味で用いる。しかし著者はこの言葉に、それ以上の、つまり自己を、あるいは組織を客観的かつ冷静に見つめ、考え、判断し、実行しようとする姿勢こそが「能」であるとの意味を見出し、その欠落を「無能」と表したようだ。この指摘は日本軍のみならず、ロシア側に対しても同様になされている点、敵味方、国境、民族を越えた一種の人間観、組織論として誠に興味深いものがあつた。

百余年後のことし——。アフリカ南端の国を舞台に、世界中から代表国が集つて激戦が繰り広げられた。もっとも、こちらはサッカーというスポーツによる戦いだ。

日本代表は前哨戦ではほとんどいいところがなく、厳しい批評をされていた。酷評に近いものもあつた。選手相互の歯車がかみ合っていないことはうすうす気づいてはいたが、誰もその点をつ込んで議論することもなかった。メンバーの技術が高いことはお互いが認めるところであつたが、しかし各々は、その

高技術を勝ちにつながるようにどうやって發揮してやろうか——「オレの技術を存分に出し切れれば勝てる」という考え方が基本だった（選手談）。

ところが本番直前、選手たちに異変が起こる。

「このままでは勝てない」

先発、控え全員が集まり、選手だけによるミーティングを初めて開催。そこである選手が放った言葉に、そこにいた全員がハツとした。

「オレたちは下手くそなんだから、もつと泥臭く戦わなければだめだ！」

もちろんこの言葉に、自分たちの技量を安易に蔑む自虐性は認められない。このひと言にそれまでの沈滞ムードは払しょくされ、「オレが、オレが」的思考は「アイツの技を引き出し成功させるために、オレに何ができるか」に百八十度転換されたという。彼らが、予選、本戦、すべてのゲームにおいて見事な戦いぶりを見せてくれたのは承知のとおりだ。

愚と賢。賢と愚。この表裏一体、ひとひらの葉のごときものが舞い落ち、表と裏いづれを上にして着地するかを決めるのは、風の力ではなく、やはり自己にこそあるようだ。

（小村 正孝）

シリーズV

法然上人を
めぐる人々

◆ 第四回 ◆

熊谷直実 の 回心

石丸晶子

挿画・鈴木奈緒

十

裁判に負けた直実は怒りにまかせ、前後の見境なく京都にむかつて馬を走らせたのであった。京都に行つてどうしようという直接の目あてはなかった。ただ鎌倉にも故郷熊谷郷にもいたたまれぬ思いにかられ、馬にまたがるや西にむかつて鞭をあてつづけたのであった。

が、途中、伊豆走湯山の、と或る草庵で馬を留めたことが、その後の彼の人生を決定づけることになったのである。

草庵の主妙真尼が法然上人に帰依した女性であつたのだ。怒髪天を突く勢いで鼻息も荒々しく怨みつらみをぶちまける直実に、尼は懇々と法然上人と浄土の教えのことを論じていった。

「尼様は侍の意地というものをご存じないから、怨みを捨てよなどといわれるのだ。女性の身ゆえ、いともたやすく仏門に帰依する

こともできるのだ」

何を寝ぼけたことを、とはじめのうち天から直実は聞こうとしなかった。しかし一日、二日と静寂な草庵に留まり、懇々と論す妙真尼のことを聞いているうちに、怒りに昂ぶつた彼の心は次第に静まっていた。

「こんな平安な世界も、世の中にはあつたのか……」。

怨みと怒りで出口を失つた真暗な心のどこかに、風穴がひらいたような思いもする。

草庵に留まつて三日目、妙真尼の顔を仰いだ彼は、口ごもりながらいった。

「都へまいつた上は、われらも法然上人のお弟子になつてみようございますが……」

「おお、熊谷殿もそこで平安をえられることとございましょう。法然上人様のような御方は世に二人とおられるものではありませんぬ」

微笑して尼はいった。

「都へまいられた暁は、早速にも法然様をお尋ねくだされ。目を他に逸^そらされてはなりま

せぬ」

直実は妙真尼に別れを告げると、ふたたび海道を西にむかつて馬を走らせた。

怒りにまかせて鎌倉を出奔したのであったが、今、西に向かつてふたたび馬の背にゆられながら、直実には出奔した理由が次第々々に見えてきた思いがした。

（源平合戦が一の谷であったとき、須磨の浜辺でわれらは平家の若君敦盛殿を討ちとったが、討ちとられた敦盛殿のあのけなげさ、美しさ。荒くれたわれら関東武士の知らぬ美しい世界を、あの時、はじめて見たのだ。あの日以来、実は心の奥の奥では、侍の世界が嫌になっていった。戦に明けくれ、敵を殺しつづければならぬ侍の世界に嫌気がさしていたのだ）

—あれからもう十年が経つ。

直実は拳で目を拭った。

（考えてみれば、あの日以来、法然上人との出会いを求めていたのかもしれぬ）



N

滲^{にじ}んでくる涙を拭いながら彼は思った。

「考えてみれば、この直実、妙真尼が帰依する法然上人とは遠の昔から繋がりがあったのだ。一の谷で捕らわれた平家の重衡殿が法然上人に懺悔を願ったとき、吉水の草庵にお上人を迎えにいったのは、この直実なのだ……」
これが仏縁というものか、と直実は歩きつつ、心に一瞬、光りが差しこんでくる思いがした。

（敦盛殿を討ちとったときに芽生えた発心であつたものを、われらは以来十年というものの、法然上人の門を叩くこともせず、今日までやって来てしまった……）

しみじみと彼は思った。

しかし、凡夫の悲しさ、光りが差しこんだと思うのも束の間で、心が叔父と幕府に引きもどされるや、たちまちにして怒りで心が締めあげられる。

引きもどされるたびに直実の心は怒りに震えた。そして震えるたびに思わず、

「畜生ッ」

と道のと真ん中で彼は拳を振りあげた。喜怒哀楽が端から端へゆれうごき、直情径行の男なのであった。

十一

「侍の世界ほど汚いところはありません」自分に代わって道遍が説明してくれるのを聞きながら、ふたたび直実は呻いた。

「おお、それはたいへんでございました。どんなにお辛かったであろう」

道遍の説明に法然上人はうなずきながらいわれた。すると、上人の労^{いた}わりにみちた優しい眼差しに力をえた彼は、

「われらは今まで武士であることに誇りをもつてまいりましたが、侍の世界ほど醜いところはないのに気づきましてございます。口惜しうございます。口惜しう……」

と喚くようにいうと、

「お上人様にお目にかかりましたこの日をも
ちまして、われらはきっぱり武士を捨てまし
てございます」

と一氣にいった。

「事は、このたび鎌倉殿がわれらの上にくだ
された裁判だけではありません。先の源平合
戦であれば手柄をたてられた御弟の九郎義
経殿を鎌倉殿は成敗された。九郎殿の武勇に
嫉妬されたのでございます」

弁慶はじめ側近ともども奥州平泉に遁れて
いた義経たちが、幕府の討伐軍によって殺害
されたのはその四年前であつた。

一の谷では義経配下の武士として奮闘した
直実が、このときは幕府軍の一人として義経
討伐に加わっていた。

「親子兄弟殺しあうのが侍の世界にございま
す。先の源平合戦では、われらは敵方平家の
多くの侍たちを刃にかけてまいりました。討
ちとった敵の首級を競うのが侍にございま
す」

しきりに拳で目をぬぐいながら直実はいっ
た。

「それにいたしましても」

と彼はつづけて、

「都へまいります道中、思い出されてなりま
せんでしたことは、去る源平一の谷の合戦の
折、われらが平敦盛殿を討ちとったときのこ
とでございます。あれがわれらの発心のはじ
めであつたかもしれませぬ」

「そのときはわれらも聞いております
ぞ。敦盛殿の御首を、熊谷殿は涙ながらに九
郎殿の前に差しだされたとか」

道蓮がいった。

「……」直実の目からわつと涙があふれた。

「あれが……」

と直実は声をつまらせた。法然上人の前で
泣きながら、何か甘い感情が彼の心をひたし
ていった。

「思いおこせば、たしかにあれがわれらの発
心のはじめでございました。わが子小次郎と

同年の敦盛殿の御首^{みしろ}を討ちとったのでございます」直実は噁^すりあげた。

十年前のその日、敦盛十七歳を組みしいて首を討ちとったときのこと、今、ありありと直実の心に甦^{よみがえ}っていた。その日、関東の荒くれ武者の中で土にまみれ、戦いの中で血にまみれて育った、色黒々と逞しい小次郎とはあまりに違う、匂いたつばかりに美しく優しげな敦盛の首を、直実は夕日さす浜辺に組みしき、討ちとったのであった……

十二

法然上人の前で直実はひとしきり泣いた。涙が直実の昂ぶった感情を静め、心を清めていった。

「殺生に殺生を重ねてまいりましたわが身には、この直実の手にかかって死んだ多くの者たちの怨念^{ひんげん}がまといついております。地獄に落ちるは必定^{ひつじょう}」

そういうと彼は噁^すりあげた。



「覚悟はいたしておりますが、せめてお上人様のみ教えだけでもうけたまわることとはできませんまいか。わが身が地獄に落ちるは必定なれど、お上人様のお話を聞き、直実の手にかかって殺された方々の、せめては後世を祈りたいのでございます。走湯山の尼僧様からは、法然上人様に何ごとも仰ぐようにといわれました」

「必定というのであれば」

それまで瞑目して直実のことを聞いておられた法然上人が、静かに口を開かれた。

「弥陀仏の御誓願によつて、必ず浄土に往生することこそが、必定なのです。その他のことは一切不要です」

「……」

一瞬、直実はハツとしたように顔色を変えて法然上人の御顔を仰ぎみた。

温かく穏やかな、微笑を含んだ法然上人の御顔がそこにあつた。

「―恐れながら…」

直実は口ごもつて、

「恐れながら、何と仰せであつたのでしょうか。浄土往生が必定とは…。今われらは、殺生を重ねてきたこの直実が身のことを申し上げたのでございますが……」

法然上人の御顔にふたたび微笑がひろがった。

「わたくしは直実殿のことを申し上げたのです。お念仏によつてわれら凡夫もみな、浄土往生が可能になっております。弥陀の御誓願の御力によつて」

伊豆の山中で妙真尼の話を聞いたときは、怒りに猛^{たけ}る心が静まっていきはしたものの、話がよく分からなかつた。周囲の静寂のなかで一面心地よくその話を聞きはしたが、人を殺したことなどない尼僧なればこそその念仏往生の話であらうと思つていた。

―それが、直実においても念仏往生が必定であるとは……

(しかし、しかし、それにしても……。われ

らの心を惹きつけてやまぬ法然上人様のこの
ご人格はいったいどこから来るのであらう：
…

「今仰せを伺いまして、われらにはみ教え
のほどがよく分かりませぬ。み教えを伺いと
うございます」

大きな体を縮め、平伏して直実はいった。

「地獄に落ちるが必定なれど、万に一つも往
生する道があるならば、この手も足も切りと
って往生したいと思っておりましたに、念仏
一つで往生できるとは…」

号泣が直実を襲った。つもる思いに直実は
泣きに泣いた。

泣きに泣く直実の泣き声だけが、しばし庵
室の静寂をやぶっていた。

法然上人は瞑目し、道遍も道蓮もことばを
発さない。

とやがて直実は、

「しかしお上人様」

と拳で涙を拭いながら、

「やはりわれらには往生が叶いませぬ。われ
らは叔父を許せませぬ。鎌倉殿をお怨みして
おります」

法然上人は瞑目したままでいわれた。

「許せぬならば許せぬままで弥陀の御名を念
じられればよいのです。お怨みしているなら
ば怨む心のままで念仏されればよいのです。
許す心になってから、怨む心が消えてから、
念仏しようとするならば、われら凡夫は生涯、
念仏などできませんまい。今の心をそのまま弥
陀にお捧げしてお念仏なさい。後は弥陀がよ
くしてください。それが浄土の教えなの
です」

法然上人は静かに諭された。

草庵に枝を投げかけたもみじの青葉がそよ
ぎ、風が通りすぎていった。

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第十七回

資料篇



フォト紀行

渡辺海旭と ストラスブール

写真撮影：清水準一

本連載では、渡辺海旭という、傑出した宗教家にして教育家、社会事業家、さらには詩文家にしてコピーライターなど一つの器にはおさまりきれない桁外れた人物像を紹介してきたが、その「多芸多才」の源泉は間違いなくドイツ留学時代にある。

明治五年（一八七二）浅草に生まれた渡辺海旭は、浄土宗東京支校を優秀な成績で卒業。明治三十一年（一九〇〇）、第一期浄土宗海外留学生に選ばれて、ドイツのウィルヘルム二

世皇帝大学（現ストラスブール大学）に留学。一一年間にわたりサンスクリット語、チベット語、パーリー語を学んで比較宗教学を修め、帰国後は明治の近代化のなかで伝統仏教の再生・再興に大いなる貢献を果たした。

先般、私の芝中時代の恩師で写真家でもある清水準一先生と芝中で一期下の中川一君の三人連れでストラスブールへ赴き、若き渡辺海旭の足跡を訪ねることができた。今回はその成果の一端を写真中心にご案内し、前回の日本人留学仲間・足立文太郎と海旭の交流秘話をうけた「閑話休題」としたい。

ストラスブールは人口二七万人、ライン川の支流イル川の中州につくられた独仏国境の古都。現在はフランス領で世界遺産に指定されている。名の由来はラテン語で「道の駅」。そこからヨーロッパの十字路であることが窺い知れる。ローマの影響下を脱してからは、独仏の争奪の地となり、その中でルネサンス、市民革命、ナチズムとヨーロッパ史を象徴す

る出来事を身を以て体験してきた。現在欧州議会（写真①）がおかれているのも、この町が戦争と平和の十字路だからであろう。

海旭が留学したのは、普仏戦争で勝者となったドイツ（プロシア）占領の時代（一八七一年一八一八）、戦乱から復興にむけて新しい町づくりがすすめられているときだった。海旭は、そこで新旧ふたつのストラスブールを体験したと思われる。

旧いストラスブールのシンボルといえばノートルダム大聖堂（写真②③）。ゲートに「荘厳なる神の木」と絶賛され、一四二メートルの尖塔は街のどこから見晴るかすことができ、海旭もこれを頼りに迷子にならずにすんだことだろう。ほかにもフランス王政下の面影をとどめる運河に囲まれたプチフランス地区では舟遊びに興じ、旧市街のあちこちに残る歴史的建造物を愛でたのではなかろうか（写真④⑤⑥）。

かたや新しいストラスブールのシンボル

① 欧州議会の超近代的建物群。市街の「古都風」とは対照的。



③



②



ノートルダム大聖堂（外観と内部）1176年から250年の歳月をかけて建造された。中世の敬虔なる輝きを残す内部のステンドグラスもすばらしい。

は、この時期に建設がはじまった市内の公共交通システム、トラム（路面電車）だ（写真⑦）。いまでも市内を四通八達してストラスブルの景観の一つになっている。当時はヨーロッパ初の蒸気機関車による路面電車（ただし市街地は馬が牽引した）、海旭もこれをつかって市内を往来したはずである。海旭が通ったストラスブル大学本館も、新しい為政者の威風を示さんとする赫々たるドイツ様式（写真⑧⑨）で、海旭留学時はできて十年ほど。今も哲学・宗教学系の建物となっており、海旭はここで研究に没頭した。

今回の収穫のひとつは海旭の「下宿先」をほぼ特定できたことだ（写真⑩）。海旭が「浄土教報」に寄せていた近況報告「吾が南独の僑居は、西向きの一室で、大学植物園の枯池を眼底に瞰下し、枯樹千本重なり合へる中、天文台と理化学の教室とを隔て、遙かに一百四十メートルのミュンステル大高塔を雲霧の中に望むのである」から、天文台を頼り

4

⑤ 船から見上げる旧市街もまた格別の趣き



入口上の数字から1761年、すなわちフランス王政下の建造と知れる

元フランス王政下の宮殿、現在は博物館になっている

6

⑦ 今や環境に優しい未来志向の交通機関



8

ストラスブール大学本部（外観と中庭）。
1884年に竣工。大学自体は400年近い
歴史をもつ。



9



10 海旭が寄宿したと思われるアパート。竣工年を示す1898も特定の根拠となった。



に探り当てることができた(写真⑪⑫)。

往時ストラスブールは復興がすみ自由な気分が横溢していた。社会民主主義勢力が台頭、海旭が渡独して六年目の一九〇六年には市議会で社会党が第一党に躍り出る。彼ら「社会主義者」との交流があったことは想像にかたくなく、それが海旭が帰国後に手がける労働者救済の社会事業に結実したと思われる。

さらに、この時代には新規の産業の振興がすすめられたが、中でも目立ったのが食品加工でそのなかの華はフォアグラ。そのフォアグラとならんでこの時期のストラスブール名物はアスパラガス(写真⑬)。帰国後、海旭は「料理の友」に寄稿、「五月を過ぎるとアスパラガスが南独の名物として盛に市場に出る。大詩人ゲーテは非常に愛用して之を蔬菜の大王と讃した程だ」と記している。

われわれもこれを大いに食し、百年前の海旭を想い、連載の充実の決意を新たにしたのであった。



⑬ ストラスブール名物の白アスパラガス。
アルザス名物白ワインによくあう

⑪ 天文台 (荘重な外観)



⑫ 天文台内部 (優美なサロン風)



浄土誌上句会

FORUM
浄土の広場

●群

〔特選〕矢車草群れてダムへの道静か

井口

栞

ダムに至れば空は開け、ダム湖が豊かに水をたたえているに違いない。そんなことを思いながら、日陰を好む矢車草の群生などを眺め、木の間を縫う道をたどって行く。人に会うこともなく、辺りは静まり返っている。

〔佳作〕水仙の群匂う日和かな

河合富美枝

群るる鳩犬が見ている芥子の花

山口 信子

群生の笹百合涼し杉林

井村 善也

●舞

〔特選〕舞台裏黒子の汗を拭いやる

石原

新

舞台の役者を陰で支える人達である。陰とはいえ重要な役割りで、舞台の進行を左右することさえあるのだ。いま役者の熱演が終わ

り、黒子もひっ込んだ。汗だくである。労を
ねぎらうようにそつと拭いてやる。

〔佳作〕

初夏の旅舞妓と逢うも二年坂

佐藤 雅子

雨乞いの舞いどろどろとはじまりぬ

斉田 仁

悠然と舞う鳶真夏の海光り

増田 信子

●自由題

〔特選〕

薄物の親子よく似し体つき

佐藤 ゆう

衣替えの日は以前ほどには決まっていない
が、五・六月には夏服になる。親子だから、
普段から何かと似ているのは分かっているの
だが、薄物になって体つきのよく似ているの
に、今さらのように気づいたのだ。

〔佳作〕

法要のつかれを解きし麦茶かな

中島富士子

生前を知らず溽暑の通夜に居る

雨宮 敦子

老いて得し俳句の仲間青葉風

池田 伊吹

夏草 冷奴 自由題

兼題

浄土誌上句会の
お知らせ

誌上句会〈編集部選〉

■群

群なして時返る稲雀
蛾の群るる暮前の酒に酔いたるや
星消えてつつし群青色となる
群青をおほきく吸ひて蓼茂る
初夏を大きな声が群れて行く
アカシアの大群落を吹きわたる
ひと群れの草となりたる南風
群れて飛ぶ燕の行方追っており

■舞

黒揚羽谷千丈の空を舞ふ

河合富美枝

佐藤雅子

中島富士子

金井 楨

小林苑を

井口吾郎

目黒 裕

村田 篠

中村洋子

締切・二〇一〇年九月二十日

発表・『浄土』二〇一〇年十一月号

選者・増田河郎子（『南風』主宰）

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

●葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

■自由題

更衣して子等はゆく小雨中
倒れ木にねぐら奪われ梅雨鴉
先代の回忌勤めし労を智る
草刈って古き祠へ道つくる
はつ夏の駅に干されてあるタオル
六月の青い息して坂登る
南風や湖面を渡る蛇一尾
炎天や天狗の眉のはねあがり
葛若葉無人のタムの拡声器
ポート場動くものなき涅槃かな
留守の家回覧板に落そえて
松の芯摘み終え汗のシャツを脱ぐ
風薫る友を訪ねて送られて

夫逝きて舞ふを忘れし夏落葉

舞ひ飛んで燕の空となりけり

溪流へ舞い落ちてゆく花うつぎ

改札を抜ければ燕舞うばかり

噴水の舞うとも風に揺るるとも

百合化して蝶となる日の晴れ舞台

羽化の蝶渾身で舞う初飛行

舞い上がる初夏の青空つがい鳶

中島富士子

村田 篠

小林苑を

目黒 裕

新島朱音

園田亜由美

浜口佳春

斉藤幸雄

佐藤雅子

河合富美枝

飯島英徳

斉田 仁

村田 篠

中嶋いづる

目黒 裕

金井 楨

内藤隼人

園田亜由美

山口信子

井村善也

寺下忠至

A black and white cartoon illustration of two children swimming. In the foreground, a boy with short dark hair is smiling and floating in a large, round lifebuoy. He is wearing a dark swimsuit. In the background, a girl is swimming on her back, with only her head and arms visible above the water. The water is represented by simple horizontal lines, and there are stylized clouds in the background.

かまち♡ふにろう

A black and white cartoon illustration. On the left, a man with a large nose and a question mark above his head stands looking towards the right. In the center, a small child with dark hair and a striped shirt stands looking at a dog. The dog is on the right, facing left, with a large question mark on its back. There are several question marks floating in the air above the dog, and a large question mark is on the ground near the dog's front paws. The background shows a simple fence and a tree on the right.

鯨雲鱗数えてまどろまん

岱潤

この夏、育児放棄でわが子を殺してしまつた両親が逮捕された報道があつた数日後、東京都や区が認識する最高齢者が、

実は三〇年前に亡くなつていて、そのご遺体がミイラ化されてご自宅から発見されたり、別の高齢者は何年も前から行方不明で、家族でさえ生きているのか死んでいるのかわからないなどということが判明したりと、ちよつと耳を疑うような、悲しいニュースが続いている。行政の責任を問うよりも家族の崩壊、命に対する心の損失の方がもっと問題だ。

新聞のコラムは、都会の砂漠化の深刻

化と評していた。人間関係が乾ききつているのは個人情報保護法も一因しているという指摘もうなずける。隣を気にすることすら、悪いことのような風潮すらあるからだろう。

親である高齢者が行方不明という話は、その後全国で二七〇件以上報告された。親の死を確認しようとしめない家族が何人もいるということに、驚きを隠せない。親の最後を見届け、しつかりとお浄土に、または天国に葬送の儀礼を勤めることは、家族として子として当然の務めであるはずだったのに。

先日山折哲雄氏が「戦後日本人は、葬送と言つていた儀式を、告別式としてし

雑誌『浄土』
特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
北山大超(焼津・光心寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(芝・天光院)
脇 博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山・光明寺)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

まった」とおっしゃっていたが、お浄土に送るという信仰が、個人的エゴである単なる自分たちの別れに変わったということだろう。今こそ宗教者の頑張りどころだ。(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤寛道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

七十六巻九月号 頒価六千円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第二種郵便物認可

印刷 平成二十二年八月二十日

発行 平成二十二年九月一日

発行人

編集人

印刷所

〒一〇五〇〇一一

東京都港区芝公園四七四明照会館内

発行所

法然上人鑽仰会

電話 〇三(三五七八)六九四七

FAX 〇三(三五七八)〇二二七

振替 〇〇〇八〇・八・八二八七

ホームページ <http://jodo.ne.jp>

摂せつ取しゅ不ふ捨しゃ

全衆生を救い取り残さず
無量寿経

生野善應

亜細亜大学講師
東京高輪・光福寺住職

阿弥陀如来の 救いの許容量はとても大きい

日常生活で余り念仏を称えることもなく、称えても雑念一杯なのが、庶民の現実の姿です。阿弥陀如来の救いの許容量が大きいから、中途半端な念仏でも人は救われているのだと悟った時、測り知れない阿弥陀如来の慈悲を、人は実感いたします。

人間の主要な生活環境の空気や水には、億単位

で危険な化学物質、ウイルスや細菌が存在しているにもかかわらず、呼吸し、水を飲んでも危険が及ばないのは、天地宇宙一切を統べる大きな力が働いていると理解した方が力まずに生きられます。その大きな力を阿弥陀如来と呼びます。「アバウト」（中途半端）ではない人間は、如来に全てをお任せすれば、安心していられます。

法然上人鑽仰会の

本

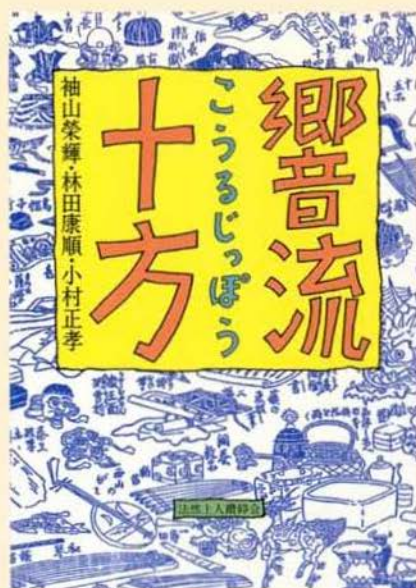
当会発行の書籍、雑誌
のお求めは、当会へ直接
お申し込みください。

なお、月刊『浄土』を除き送料は
含まれておりません。別途実費を
申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話／03-3578-6947

FAX／03-3578-7036



響流十方こうるじっぽう
600円(税別)

『差出人は法然さん』
600円



月刊『浄土』
バックナンバー



『念佛讀本』完全復刻版
1,600円



中綴装寸法 47×59cm



選擇集十六章之図(額入り)
『選擇集絵解き物語』含む
20,000円(別途梱包料300円)



『法然上人絵伝絵葉書』
(8枚セット)500円



中綴装寸法 47×59cm
『法然上人絵伝・残欠一巻本』より